

10

10
2016

10月11日(星期一)



野分晴

能村 研三

成就の会

先日「萬緑」八百号祝賀会が東京墨田区錦糸町のホテルで行われた。八百号を迎えた「萬緑」は、来年三月号で終刊になるという。今回の祝賀会はその意味もあり、「萬緑成就の宴」という案内をいただいた。華美な演出はせず、来賓は金子兜太先生をはじめとして黒田杏子、西村和子、橋本榮治、星野高士、鈴木貞夫、大串章、宮坂静生、徳田千鶴子、竹中宏の各先生など少人数だが鍾々たる顔ぶれであった。

「萬緑」とは選者の横澤放川さんと親しくお付き合いがあり、合同句会を行ったこともある。

先師登四郎も草田男の『長子』は幾度となくむさぼり読んだという。波郷、楓邨と共に人間探求派に大きく影響された時、草田男は敬愛する作家のひとりであったはずだ。草田男が亡くなったのは昭和五十八年八月五日で、一週間前の七月二十八日に私の母が亡くなっており、母の葬儀を終えて間もなく、父は草田男の葬儀にも参列した。

私も草田男先生は俳人協会の全国大会で講演をされた時にお顔を拝見

回遊にさからふ魚涼しかり

徽の書の書架一段は畏くも

古簾を結界にして猫嫌ひ

甚平着て忘れしふりを通しけり

渡されて男日傘のはにかみぬ

秋扇途切れし話そのままに

山芋を掘る焼印の著き 鋏

直汲みの新酒を喉にいたただけり

新米袋節くれの手が突つ立たせ

野分晴羽毛の絡む蛇籠の目

した。先生は講演の予定時間をはるかに越えて、係の人が時間を何度告げてもその制止には応じず、悠悠とお話を続けられ、その情熱に感動した。登四郎は、草田男の向目的でエネルギッシュな人格に大きく惹かれたのではないかと思う。

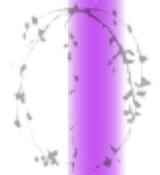
「萬緑」は主宰制をとらず、中村家の娘さんで、お茶の水女子大学名誉教授の中村弓子さんが発行人を務められ、祝賀会には三人の娘さんが出席された。

この祝賀会は、単なる終刊を記念する会でなく、「成就の宴」と銘打ったのがすばらしい。選者の横澤放川さんは『萬緑』は草田男そのもの。草田男を直接知る人も少なくなり、結社として役割を果たした」と終刊の言葉を述べられた。

金子兜太先生が挨拶に立たれ、「いろいろ話はあるが、話し出したら一、二時間もかかるので、バンザイをします」と言って、「中村草田男、バンザイ」と皆で万歳三唱をした。

来年四月からは、横澤さんが代表となつて「森の座」が創刊され引き継がれるそうだ。

蒼茫集



ほとけ道

梅村すみを

竹酔ふといふ日しづかに雨降れり
一面に咲いてもさびしひつじぐさ
囚はれの身のごと網戸の中に座す
海風の通ふ二階に昼寝せり
パスタくるくるフォークに巻いて灯の涼し
青大将に出逢ふもご縁ほとけ道

ひと雫 田所節子

シャワー浴び水の若さを貰ひけり
かき氷青空削るやうな音
信号の色の涼しき朝の町
鎌研いでゐる道端の麦稈帽

力抜き波に従ふ海月かな
星飛び一生てふはひと雫

見えざる船

荒井千佐代

求愛の薔薇をけふより逆さ吊り
炎昼や弔花りくぞく届きをる
テロテロテロ夾竹桃は血色なる
籐寝椅子夕闇すでに裸に
身の裡の潮引きゆく夏満月
夜の秋や見えざる船の汽笛聞き

針の穴

林昭太郎

電子音聞かぬ一日鮎の宿

炎昼や梅干しんと甕の中
八月の庭八月の疲れあり
風鈴の愛想鳴りして買はれけり
新涼の糸のくぐれる針の穴
民宿に魚拓あふれて夏終る

点 火 内山照久

月よりの使者の座烏瓜の花
寺涼し竹林ゆらす風の音
大夕焼太平洋に点火せり
梅雨晴間海図のごとき潮目かな
八月を祈りの月といふべかり
思ひ出はいつもモノクロ終戦日

花 結 び 大川ゆかり

掛香の花結びなる朱の紐
蚕豆のドレミのやうに莢の中
ガーベラやひとりの昼餉ゆつたりと

天花粉嬰あちこちを抓まれて
夜の秋十七弦箏音深く

詩ありき 辻美奈子

折鶴のやうな詩ありき終戦日
アスファルトより夏蝶の黒浮かぶ
蜘蛛の囿に重くてならぬ水蒸気
有耶無耶のまま子子の育ちけり
カンナまだ緋であることを諦めず
新涼の風の手ざはり変はりけり

日 本 に 千田百里

祭笛思ひ出に音なかりけり
シンプルな日の丸涼しリオに揚ぐ
千の風吹くや日本に八月に
白き風起し廊ゆくナースかな
目の鱗鱗落すに素風借り申す
彼の世元・急逝でもとくと酌まれよ銀河濃し

醉芙蓉 森岡正作

飲み仲間みんな西日を負うて来る
海人小屋の砦めきたる晩夏光
鰻屋のうなぎに似たる三代目
放蕩の腰括らるみ酔芙蓉
門火みな焚いて村中賑はへり
枝よりも太き柚子坊恐れけり

今夜かも 菅谷たけし

濃紫陽花働かぬ日む疲れけり
扇風機妻との会話噛み合はず
蟻地獄そは稜線ぞ落つるなよ
土用波強気の徐徐に戻りけり
命継ぐためと知りても蚊を憎む
今夜かも月下美人の力充つ

口だけは 吉田政江

胸釦二つ外して今日大暑

口だけは元氣老人鰻の日
反論の潮時を待ち心太
夏炉焚く魚の白き塩焦げ
油照り顎紐のゴム伸びきりし
羽撃いて夕日を零す羽抜鶏

北指向 杉本光祥

メロン切る七等分は難しき
踏み込める一步の頼り登山杖
雲海に小島のごとく槍・穂高
浴びるほど星を仰ぎてキャンプの子
川の字に寝て涼しかり大広間
山の日や磁石はいつも北指向

どこか凸凹 千田敬

パソコンにわれの夏風邪診てる医者
手もかけず期待もせぬに黴の華
宵山や都塵も伴にコンチキチシ

灯が入れば浅草匂ふどぢやう鍋
病む地球ガイア知るや知らずや月涼し
季の移ろひどこか凸凹秋に入る

綿 飴 安居正浩

綿飴にからめとられる夜店の灯
容赦なく西日差し込む喫煙所
すててここで熟考中と言はれても
掃除機の胴体透けて蟬の昼
滝音の真つ直ぐに来る胸に来る
ガーベラや巻き戻したき日暮あり

息衝くごとく 秋葉雅治

螢火や息衝くごとく絶つごとく
翠巒山中村絃子さんのすがしさに似てシヨパン弾く
燃え初めて須臾に炎と化し曼珠沙華
生身魂に「山の日」といふふしあはせ

秋蟬の初音短かき静寂かな
当今の俳風の始祖子規忌来る

誕生石 宮内とし子

炎帝に負けじ誕生石はルビー
蟬の穴関東ローム乾ききる
八月の閑けさにゐて木々戦ぐ
籐椅子の人結論を出しにけり
争うてまた羽減らす羽抜鶏
無一物の軽さくらげの裏返る

四連符 柴田近江

合歓咲いて風湧く丘のワイナリー
朝涼の水音はぐくむ樵林
白南風に干す長靴の四連符
蟬遊業羅層亭の空ゆする力士の突き稽古
髭崩るる汗のぶつかり稽古かな
みんなん蟬小兵力士の四股曝す

潮鳴集



百日紅

平松うさぎ

国率ゐる女の増えて百日紅
天地に楽の音放つ蓮の蕊
国訛り染みて帰りぬ夏帽子
夏燕八ヶ岳全景を宙返り
檀尻の熱引回す街の辻

水の器

大森春子

レモンスカツシュ進路の夢をはばからず
ぎざぎざのパン切りナイフ草田男忌
せせらぎに魚影をさがす夏の果
にんげんもへちまも水の器かな
八月や「無名戦士」の鎮魂歌

話し中

望月木綿子

君が代を唄はぬ案山子唄ふかがし
天皇のおこころ露の世へひらく
三日月の宙ふらりんであるこち
鬼の子の風ひたひたと話し中
たましひが干涸ぶ前のましら茸

夕虹

菊川俊朗

夕虹や昔の空の大きくて
手を入れて手になつかしき泉かな
藻の花を行くや舳先に沈めつつ
公園の隅に機関車雲の峰
郵便のまだ来る生家カンナ咲く

水割り 栗原公子

水割りの琥珀透けぬる夏の果
投函のポストの口の灼けてをり
夏の果ゆふべ開きしままの本
流さるるふりしてみせる水馬
登校の列みだしたる青蜥蜴

清張忌 神戸やすを

列島の火山ふつつつ清張忌
西日差す開かずの窓の巨大ビル
流星を碧き星より見てをりぬ
スカイツリーの天辺見ゆる端居かな
向日葵の反省ポーズ頭垂れ

初穂 大沢美智子

炎天をぐるりと回し人力車
鳳凰の唧へる初穂神輿練る
パプの椅子道に溢るる夏の月
空蟬の継る荒草引かずおく
夜通しの雨の濁りに蓮ひらく

垂直に 峰崎成規

夏果の波へ去る砂残る砂
関東の沸点囲む遠青嶺
捨印の有効無効敗戦忌
生きるとは一方通行蟬の穴
新涼や珈琲の香は垂直に

ほたほたと 七田文子

風の無き日中や凌霄花ほたほたと
水脱いでまた脱いで水大噴水
暮れがての風鈴星を振り出す
夕立雲しづくまみれの対向車
星空を天蓋として夜のプール

こだま包み 安藤しおん

吊床に水七割の身をまかす
山の日の空気ふんはりサラダ盛る
星飛んで逆転の運重ね合ふ
蔓先を虚空にとどめ風は秋
おどし銃こだま包みに村閉か

沖作品



能村研三選

背泳ぎや利き手の強き子の曲がり

千葉

坂本 徹

涼しさや採血の針すつと入り

夾竹桃午後休講の文学部

夏帽子見上ぐキリンの咀嚼音

生きて死すただそれだけや蟬の殻

噴水の穂先で踊る陽のピエロ

市川

藤代 康明

賄ひの美味さは修業夏料理

表具師の技の冴え見ゆ夏座敷

田の波を浮きつ沈みつ麦桿帽

浴衣掛け六輔てぬぐひ談議かな

あめんぼに窪む重さのありにけり

江ノ電に乗つて炎暑を振りはらふ

首都圏は大き瘡蓋灼けにけり

ワイングラス傾げ晩夏のジャズビート

氣象士の眼のきらきらと台風来

神奈川

大矢 恒彦

日曜の官庁街や蟻の道

埼玉

須賀ゆかり

夕さりや鬼灯市の声聞くる

梅雨月や鞆に入れる喪の真珠

祇園会の夜を満たしゆく鉦の音

船形の送り火西へ漕ぎ出しぬ

メタセコイア空突く高さ梅雨あがる

千葉

棚橋 朗

勢ひ水神輿昇く娘の髪濡らす

山車廻し辻に競へる男意気

追山笠の韋駄天走り水を呼ぶ

哀調へ笛の音変り祭果つ

水音もメニユーの一つ夏料理

麦藁帽わしづかみして挨拶す

甚平を着て聞き役になりきれず

トンネルの数を指折る帰省かな

夏休み叱りしあとの肩車

塩野谷慎吾

沖作品 15句選評

*
能村研三

生きて死すただそれだけや 蟬の殻 坂本 徹

地上に出ると短時間で死んでいく蟬は、古来より感動と無常観を呼び起こさせ「ものあはれ」の代表である。蟬の抜け殻を空蟬と呼び、現身が音の変化したものである。この句はあえて「空蟬」という雅な言葉を使わず「蠅の殻」と慣用的な言葉を使ったことで、さらなる無常観を漂わせる。まるで死ぬためにだけに生まれてきたような哀れさがある。

噴水の穂先で踊る陽のピエロ 藤代 康明

夏空へ広げられた清涼感あふれる噴水は、水辺に憩う人たちに安らぎを与える。人工的に作られた装置によって、水の群れが健気な曲芸師にも見えてくる。私も昨年ラスベガスで噴水が

音楽に合わせて踊るショーを見た。この句も楽しい句で、噴水の穂先がピエロが踊っているように操られていた。

首都圏は大き瘡蓋灼けにけり 大矢 恒彦

比喩の意外性に驚いた。瘡蓋は怪我をしたときなどに、傷口にできる皮のことであるが、首都圏の瘡蓋とはどんなものなのだろうか。東京一極集中により首都圏も膨れ上がりつつあるが、灼熱の都会を少しずつ冷ましながら人々が暮らしていくには、首都圏自身が自浄作用で瘡蓋を作っていかなければならない。

日曜の官庁街や 蟻の道 須賀ゆかり

東京の官庁街といえば霞ヶ関や大手町が頭に浮かぶ。ウィークデーは人通りも多く都会の喧騒が聞こえてくる。しかし日曜日ともなると、まるで嘘のように静まりかえる。せつせと行交う人々によって都会の蟻たちが列を作って行交っていた。

哀調へ 笛の音 変り 祭果つ 棚橋 朗

お盆に行われる祭は先祖を供養する意味合いがあるためか、祭のクライマックスは祭囃子の旋律も哀調を帯びたものに変わり、次第に低くなる笛の音と共に祭が終わる。命が燃え上がった夏が終わるもの寂しさも感じる。(以下略)